

渡辺利雄 著

『講義 アメリカ文学史 補遺版』



本書は2007年に三巻本の大部で刊行された『講義 アメリカ文学史——東京大学文学部英文科講義録』の「補遺版」である。「諸般の事情から」東大在任中の講義では取り上げられなかったゆえにその「本体」から「割愛せざるをえなかった」(iii)、と著者の言う23人の作家を扱う。基本的に「本体」のスタイルを踏襲しつつも、ドーン・パウエルやノーマン・マクレーンというこれまでの通常の文学史ではほぼ全く扱われてこなかった作家のみならず、100年以上の歴史を誇る『ニューヨーク・タイムズ・ブック・レビュー』の変遷に対しても一章が丸々割かれるなど、アンソロジーとしても読めるアメリカ文学史の決定版がさらなる充実を見せたこととなる。

「補遺版」であるという前提のもと、アメリカ文学における「自伝」の意味を問う名著『フランクリンとアメリカ文学』(1980)の著者は、50年以上にわたる自らのアメリカ文学との

私的な交感(情事?)を、「本体」以上にのびのびと、時には大いなるユーモアを交えて説き起こす。巻末に付された後藤和彦との「師弟対談」は文学史として異例の試みであろうし、T.S.エリオットを論じる章では、代表作『荒地』にもモダニズムやイギリス国教会との関係にも積極的な言及はない。その代わりに議論は、自らの縄張りをわきまえつつ(エリオットの愛してやまなかった)ミシシッピ川を回遊する大魚のように、「東大英文科でのエリオットの〈イギリス作家〉としての扱いと、それに対する著者の疑義」というローカルな話題の周辺を確信犯的に悠然と回り続け、アメリカにおけるエリオット家の長い家系図を見開きで挙げるスケールの大きな郷愁的雰囲気の中で章は閉じられる。雄渾かつ“tongue-in-cheek”なその筆致は、手堅い実証に基づいているからこそなおさら、著者専門のトウエインの「キャラヴェラス郡の有名な飛び蛙」などをも髣髴とさせずにはいない「フロンティア・ユーモア」の趣きを湛えるのである。

しかしながら、そもそも「本体」から除外された作家ばかりを扱っている事実は、本巻が文学史執筆に関わる最大の問題——誰を入れ、誰を外すのか?——に他の巻よりもはるかに強く意識的になることを宿命づける。アメリカ文学とは「アイデンティティの不安」に取りつかれた文学である、との本シリーズ全般にわたる基本理解に同意しながら、読者は、「大衆小説」と「純文学小説」についてのジャンル論(クロフォード、あるいはハメットの章)、“The Yellow Wallpaper”は「フェミニズム小説」なのか「恐怖の小説」なのかについての議論(ギルマンの章)などに、文学史創造の営為一般に対する著者独自のメタ・コメンタリー的な性格を強く感じ取ることとなるだろう。

う。だからこそ、実質上の最終章でアリス・ウォーカーという黒人／女性／バイセクシュアル作家がエマソンやソローなどのアメリカ文学の「主流中の主流」に連なるものとして描き出される事態も、全巻を通じて本文学史の「仮想敵」と想定されている *Columbia Literary History of the United States* (1988) や *The Heath Anthology of American Literature* (1990) などに結実している「1960年代以降」のアメリカの(つまり日本の)アカデミズムのスタンダードとなった人間／文学／文学史理解に対する、著者渾身の異議申し立ての一環として了解されるのである。

「人間」という普遍概念を「人種／ジェンダー／階級……」と細分化してゆく視点は、「1960年代以降」の文学研究が手にしたかけがえのない現実分析のツールである。その一方、そのような視点がともすれば閑却してきた問題として、たとえば「神」の問題がある。「人間」のないところに「神」のあろうはずはないからである。旧態依然たる「人間」や「歴史」概念の「終焉」が必然／必要である一方、善／悪の根本的な区分に関わる「聖」なる概念なしにそもそもひとの生は不可能でもある、というジレンマ——「人間の不滅性」(140)、「歴史を超越した人間の条件そのもの」(151)、「永遠の相の下で神の存在を感じる鱒釣りの体験」(308)、「現代社会における人間の究極的なあり方」(322) など、これまでの枠組みにとどまる限り単にアナクロニズムと見做されてしまいかねない表現が頻出する本「補遺版」は、だからこそ、現代に喫緊の精神的／倫理的問題とも深く切り結ぶこととなる。第一巻から本「補遺版」までの通算 2000 ページを読み進めて来た読者は、「俗」のフランクリンと「聖」のエドワーズとを二つの糾える縄とするアメリカ文

学(アメリカ人／人間)の原型イメージを強力に打ちだす本シリーズが、単に楽しく読める充実した文学史であるのみならず、その身に強度の緊張を孕んだ 2010 年代以降の(人)文学研究へのラディカルな挑戦でもあることを、偉業に対する深い敬意とともに改めて思いやることになるはずである。(研究社、2010年1月、A5判 xvi+598頁、8,000円)

——中野 学而(東京女子大学講師)